

受賞作品

## 会計制度の経済分析

薄井彰著

中央経済社 828 ページ、11000 円（税別）



書評

### 証券と企業行動への役割検証

関西学院大学教授 桜井久勝

日本の会計制度の生成と発展は、国民経済を豊かなものにしてきたのだろうか。この問いに答えるべく、戦後 70 年にわたる日本の会計制度の歴史的発展を記述した上で、この制度が証券市場での価格形成に果たした貢献と、企業行動へ及ぼした影響について実証的に検証した大著である。

第 I 部では、政策形成に関与した研究者が残した行政文書等の一次史料を駆使して、戦後の会計政策の形成過程が解明され、続く第 II 部では、この制度に基づく利益や資本などの会計数値が証券市場での的確な価格形成に貢献してきたことを示す証拠が長期の実証分析を踏まえて示される。

第 III 部では、株式持ち合いの減少や、保守的な会計処理を通じた利害対立関係の調整、経営者による利益マネジメントの試みなど、会計制度が様々な企業行動に影響を及ぼしてきた事実が明らかにされ、これら一連の分析を根拠として、日本特有の現行制度のいくつかの側面につき、著者はその存続を訴えている。

具体的には、連結決算と並行した単体財務諸表の開示が経営者の規律づけを促し、決算短信で経営者が次期の予想利益を開示する制度が効率的な証券価格形成を促進する効用がある、というのが著者の主張である。

財務会計に期待される情報提供機能と利害調整機能の両方を包摂するだけでなく、歴史的考察と実証分析の結合さえを試みようとする、壮大な構想力にあふれた書物である。